

聖剣使いの禁呪詠唱～
よくある神様転生です
～

白波風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレ的展開によって神様転生した主人公。そこそこに強力な（チート）力と可愛い彼女を貰って『聖剣使いの禁呪詠唱』の世界に転生。果たして彼を待つ運命とは？「俺は運命と戦う。そして勝ってみせる」「それ剣〇さんのセリフじゃん！もく、あれ程仮面ライダーネタは少なくしろって作者さんに言われてたくせに！」「そんなこと俺は知らん！やりたい事をやるだけDA☆」「前世から変わらないね、そーゆーところ。でも、そこも大好きだよっ」

と、いう感じのバカッフルな展開が多数起こりますが、決して壁を殴らないように。壁って意外と響くし壊れやすいんですよ？因みにこれも趣味全開です。

目次

プロローグ	テンプレな展開	1
第0話	原作の前に	4
第1話	1組と最低クラスは基本主人公のクラス	7
第2話	私の心は晴模様	10
第3話	なして嘯ませてウザいのかな	14
?		14
第4話	スクラップの時間だぜエエエ!	17
	クツソ野郎がアアアアア!	17
第5話	かの武器とその秘密	23
第6話	という名のちよつとしたお話	25

第6話 来訪者

32

第7話 実戦部隊とイレギュラー

38

プロローグ テンプレな展開

俺は知ってるぞ。こういう白い空間、そして目の前にいるジジイ。やはりここは……

「俺死んだか。しかも神様の手違いとやらで」

「よくわかるのお、お主。それなら話は早い。お主には転生してもらおう」

「やっぱりか……なんかこう、ヲタク冥利には尽きるんだけど、嬉しくない……」

「因みに世界は、『聖剣使いの禁呪詠唱』じゃ」

「……まじか？！最近一番好きなラノベの世界じゃねえか！

「特典とかはあるのか？」

「あるぞ、他の神もやらかしたときはそうしとるからの」

「うーん……じゃあ、

「まず一つ目、俺に通力フレイムを扱う才能を。二つ目、前世は抜刀剣士、武器は刀な。三つ目は彼女欲しい。それも前世では夫婦で今世では幼馴染の。四つ目は、一廉程度には身体能力と頭脳が欲しい。五つ目に、カッコいい容姿と体型が欲しいな。最後に、草笛の才能が欲しい。あ、耳コピできる様にして、なんでも吹けるレベルのな」

「彼女の前世はどんな風じゃ？」

「んー？くノ一かな。武器は原作のA Jさんの奴をもっと和風にした連結機能なしのやつ」

「要求が多いように見えて実はあまり無駄な能力とかはついたりせんのか。エンシエン トドラゴンにならなくて良いのか？」

「だってあれ立場とか面倒くさくなるし。あ、追加忘れてたんだけど、千里眼が欲しい。彼女には動物や建物とか、あらゆるものの声を聞く能力。ただし両方制御は可能の状態
でな」

「それは今世で、ということか？」

「あつたりまえさ。なきや要求する意味がない」

「わかった。それではそろそろ、行った方がいいかもしれんから送るぞ。あ、要求の身体能力並びに頭脳と、草笛関連はあまりチートではないから、チートとしては扱わんつもりで頼む」

「わかった。ああ、あと、転生は産まれた時からにしてくれる？」

「それが最後の要求か？では送るぞ。じゃなかった、すまぬが、彼女の名前を決めてくれるかの？」

あーそれ忘れてたな……じゃあ

「容姿は東方の咲夜さん。あ、髪の色はまんまな。特異体質ってことで。名前は、花崎満

月ではななきみつぎ。こんなかんじでどうかな？」

「うむ、いいと思うぞ？では送るぞ。あ、能力が覚醒するのは3歳ぐらいからじゃかな」

「いろいろありがとな神様。あんたの神社見つけたらお参りしとくよ」

「わしは稲荷のより高尚なものじゃからの。お参りしたいのなら京都の伏見稲荷かと思
うぞ」

「じゃーな神様。また会えたらゆつくり語ろうや！」

「うむ、行ってこい。『逢沢 岳』よ」

そして俺は光の中へ歩いていく。新たな人生を歩むために。

第0話 原作の前に

やあ、オリ主の岳だ。今俺は、亜鐘学園の校門前にいる。

「今日から楽しみだね！岳」

そう言うのは、俺の幼馴染にして彼女にして婚約者の満月。まあ、俺が神様に頼んだだけだが。

「ああ、そうだな」

そう返事をする。今日は亜鐘学園の入学式。原作に思いを馳せながら、俺は今日の日までの色んなことを思い出していた。

↓以下、これまでのオリ主↓

まず、草笛の才能に目覚めたのは3歳の頃、まさしく神に言われてた通りだった。この頃に、俺は満月と出会ったりもした。親の仲も良かった事もあって、毎日一緒に遊んでいた。小学校に入学してからは、身体能力と頭脳を活かして楽しく過ごした。友達みんな、俺と裏表無しに仲良くしてくれた。因みに、俺の容姿はSAOのキリトくんと、いつ天の大兔を足して二で割ったようで、身長も中々に育った。中学に入学して同様に過ごしながら1年が経ち、俺は満月と付き合い始めた。もともと夫婦みたいだって言わ

れていたから、あまり周りに変化はなかったが。そして更に少し経った頃、俺には救世主としての記憶が宿った。程なくして、千里眼も使えるようになった。そして、同じ頃どちらも宿った満月に、俺はその年のクリスマス、満月に指輪を渡して

『満月、俺は前世からも今世も、来世もそのまた次も一緒にいたい。だから、結婚しよう』
なんていうようなプロポーズをした。ホワイトクリスマスだったその日、満月は、

『はい。でも、今はまだ結婚できないから、しばらくは彼女で居させてほしいな』

と返答してくれた。え？草笛といい、プロポーズの口上といい、お前厨二病だろ。だって？失礼だな。俺はこういうのが好きなだけだ。あえて言うならロマンチストと呼んで欲しい。因みに、指輪は今までの小遣いとかお年玉とかを貯めに貯めた金で買った。そんなこんなで、中三の頃非公式に受けさせられたテストによって、原作の諸葉同様に、この垂鐘学園に導かれることになった、というわけだ。

そういえば、京都には親に頼んで毎年お参りに行った。熱心だったし、個人でたまに来ていたので、神主さんや巫女さんとは顔馴染みになった。出来れば今年も行くつもりだ。本当、名前を聞いておくべきだった。

くそして現在く

と、まあ、それなりにいろいろあったわけだ。オリ主だからチートだからと楽はしない主義だったから、さっきの回想には乗っけていなかったが、バーリー・トワードをずつ

と教えてもらっていたりした。さて、そろそろ行くとするか。

「行こうぜ、満月」

「うんっ！行こう！」

この踏み出す一歩は、俺の始まりの一歩だ。だから、これから頑張らなきゃな。

「あ、そうだ満月」

「ん？」

と、俺は満月にキスをする。ま、軽いもんだけどな。

「もう！急にしないでよね！びっくりしちやったよ」

「悪い悪い、同じクラスかはわからないし、しばらく大っぴらにはできないかな、と思っ
てな」

「それならいいよ。じゃ、行きましょ！」

「そうだな」

そして一歩を踏み出した。さあ、原作ライフを楽しむぜ！

第1話 1組と最低クラスは基本主人公のクラス

やあみんな。オリ主の岳だ。長つたらしい入学式が終わって、クラス分けされたクラスに戻った。俺は1組、満月も1組だった。神に感謝しつつ、俺は1組のドアをくぐる。そして、案の定空いていて、そこが席の奴の気配がない席が3つ。主人公の灰村諸葉、妹ちゃんの嵐城サツキ、嫁さんの漆原静乃の席だろう。今頃は、サツキの頭突きで諸葉が起こされている頃だろう。んで、「兄様!」「すまん、俺には記憶がない」とかやっている頃だろう。ま、そんなことはどうでもいいからな。だって、あの原作イベント、ただ裏山なだけだし（非リア時代ならば）リア充化、てか嫁さんがいる今となっては他人の話だ。非リアってなんか緋弾のアリアの略みたいだな。今更だけど。まあ、そんな感じでチャイムも鳴って全員集合。《異端者》^{メタフィジカル}の動画を見て、いざ自己紹介、と思つた時だった。

「1県出身。出席番号三十番。嵐城サツキ……」

このイベントを忘れていた俺も、すっかりポカンとしてしまった。不覚にも。

「学校で二番目に強い《救世主》^{セイヴァー}になるようがんばるわ。皆このあたしについてきなさい！」

……まあ、こんなこと言ったらこうなるか。つてくらいに強烈なブーイングが発生した。まあ、すぐ諸葉が助け舟を出してはいたが。てことで出席番号一番の俺が自己紹介だ！（ノゲ○ラの空風）

「神奈川県出身、逢沢岳だ。特技は草笛と声帯模写、好きな食べもんは満月の作る料理ならなんでも。あ、もし満月に手を出したらパライイしてやるから。そのつもりで。じゃよろしくね☆」

まあ、平凡かな？まあ、そんなこんなで進み、次は満月。

「神奈川県出身、花咲満月です。特技は家事全般、好きな食べ物は岳の食べさせてくれるものならなんでも。あ、もし岳を襲ったら引き回しの刑ね。そのつもりで。じゃあよろしく願います☆」

俺と満月がただならぬ関係だと思ったのか、少しクラスがざわめく。うるさいなあ……まあ、いいんだけど。

またサツキが自己紹介しようとしたら睨まれてた。哀れなり。

そして休み時間。当然のように満月と昼に何を食へに行くかを話していると、クラスの女子が寄ってきた。

「ねえねえ、ふたりはどうゆう関係なの？教えてよ」

そーよそーよ！と、まるでバックコーラスみたいに言ってくる女子達までいるから困

る。仕方がないので、左手を見せてやった。薬指に付いている指輪を見て、女子達にわかに騒ぎ出す。ああ、男子は別の理由で騒いでいた。きつと乳比ベイベントが発生していたのだろう。

まあ、そのまま初日は終わり、俺は満月と昼飯を食べてから分かれた。これからの日々が楽しみでならん気持ちを噛みしめつつ、俺は帰途につくことにした。

第2話 私の心は晴模様

やあみんな、オリ主の岳だ。時は流れた。2日目、いよいよ運命が動き出す日だ。午後の授業、すなわち実技が始まる日だ。要するに《源祖の業》^{アンセスタルアーツ}の授業。アリーナに入ると、強い睡魔に襲われるような不思議な感覚がある。おそらくこれが、原作の『夢の世界』な感じなのだろう。

「うわあ〜！ すっごいねえ！ 《源祖の業》^{アンセスタルアーツ} ってこんなこともできるんだ！」
と、隣の満月は大はしやぎだ。ので、一応解説。

「多分、俺たちの光技じゃなくて闇術のものすっごい使い手……校長かな？ 辺りが作つたものだろうな。あの人はすっごいから」

「なあに岳？ ひよつとして浮気？」

「まさか。俺が愛するのは未来永劫マイハニーのお前だけだぜ」

なんてことを言つてやると、満月は満足そうに笑っている。

そんなこんなでアリーナの中心。担任の田中先生が話し始めた。

「先生は白鉄だから、今日は光技の授業をするよ。先生に注目。君達に手本を見せよう」
なんて言った。そして、

「ほあああああああ」

変な掛け声をあげると、田中先生の体から、陽炎のようなものが生まれた。

「君達には見えるだろうか？これが先生の通力だ」

これがか。なんだか面白くなってきた。オラワクワクすつぞ！クラスメイト達もそうみたいで、先生を急かす。しかし、田中先生はこう言った。

「君達の前世の記憶を参考にやってみなさい。そうすれば必ずできるはずだ」

まあ、当たり前つちや当たり前か。

「やったるわー！」「ふおおお！」「私だつてえー！」

……なんか、みんな空回りしてるな……そんな中、サツキが順当に両手に通力を纏ブラーナわせていた。まあ、面倒な方法で、だが。はあ、じゃ、俺もやるか。

「満月、もうやれるだろ？模擬戦しないか？」

「武器無し？いいねそれ！」

満月も了承してくれたので、先生に確認を取る。

「先生！ちよつと模擬戦やつてもいいですか？」

「見た所君はまだ門を開けてないようだけど？……まあ、いいよ。亜鐘学園は生徒の自主性も重要視しているし」

ということ、満月とお互いに7歩距離を取る。一歩下がること、一つ門を開けな

がら。7門を開通させ、記憶と違わない空色の通力^{ブライト}を出し、同じく記憶と違わない、美しさを強調するような銀色の通力^{ブライト}を満月も出していた。

「先生、合図をお願いします」

「ああ、では……始め！」

その声を聞いた、いや、その声があがったと同時に《神速通》で突っ込み、俺と満月の同時に繰り出されたハイキックがぶつかり合った。

「相変わらず初手はそれなんだ？」

「早く終わるに越したことはないからな。結構マジでやったんだが」

「あはは、私だって結構マジだよ？」

「じゃ、全力だ。ついてこれるか？」

「当たり前だよ？」

そして、白鉄同士特有の、超高速戦闘を始める。蹴りを主体に戦う俺と、手刀を主体に戦う満月。お互いがお互いを相手取った場合、なかなかいい鍛錬になると言える。しかし、俺は通力^{ブライト}の強さに、一つの可能性を見出していた。

（これ……ひよつとしてアレができるんじゃない？）

と、思い立った俺は、再び《神速通》を活かして一瞬で満月の懐に飛び込むと、満月に拳を当て、通力^{ブライト}全開で超高速で振動させ、満月にぶちこんだ。わかる人はもうわかつ

たはず、そう、アレとは、

「無空波」

これである。流石に手加減はしたけど。全身の力が抜けたように倒れこむ満月を支えながら、戦いを終えた。ちよつと……やりすぎたかな。

※2日目は終わりじゃないぞ。もうちつとだけ続くんだ。

第3話 なして噛ませってウザいのかな？

やあみんな。オリ主の岳だ。今は模擬戦の後、その後^{プラトナ}通力を順当に発動させた諸葉が、こちらに寄ってきて、こんな事を聞いてきた。

「なあなあ、さっきの戦いで止めに使った技つてさ、ひよつとして無空波か？」

「お前わかるのか！ ああ、そうだよ。ありや無空波だ。まあ、それっぽく^{プラトナ}通力でやっただけのときではあるけどな」

「やつぱりか！ 叔父さんが持つてる漫画で一番好きな作品の技だから俺興奮しちゃったわ！」

いや、これはガチで嬉しかった。最近の俺らぐらいの年で修羅の門とか修羅の刻とか知ってるやつめっちゃ少ないから計らずも「おい」ここで出会えたのは嬉しかった。嬉しかったって何回も言っちゃうくらい「おい」嬉しかった。その後、しばらく諸葉と「おい！」修羅の門について語り合っていたら、

「俺を無視してんじゃねえぞてめえら！」

なんかが来た。てか知ってつけど。石動蔵、通称愚弟が来た。ついで田中先生が、武器の出し方を教えてくれた。石動は斧持ってた。諸葉が早々に剣を出したので、俺も出

す。

(また……一緒にやろうぜ。天椿)

鞘ごと出した愛刀を鞘は腰にさし、(戦闘服にそんなスペースあつたか？だつて？気にするな) 愛刀を鞘から引き抜いた。と、

『待ちくたびれたぞこの野郎！ルイズ！お前どんだけ俺を待たせる気なんだよ！』

なんて、周りに響くような大声でしゃべり出すもんだから、俺はすぐに言った。

「うっせーぞ天椿。再会が嬉しいからつてなにもそんな大声でしゃべんな。あと今はルイズじゃねえ。岳だ」

『あー？なんだかよくわからんが、ルイズ、お前今は岳つて名乗つてんのか？』

「ああ、一回輪廻転生つてやつをしたお陰でな」

『んん、わからん。それよりルイズ……ああいや、岳だったか？メイちゃんは？』

「お前の目は節穴か？目の前にいるじゃねえか」

実際、目の前にいた。通力ブラスナよつての治癒の速さを改めて感心させられてしまった。

「天椿！久しぶり。あと、私は今はメイじゃなくて満月よ？岳から転生がなんだつて話は聞いてないの？」

『いや……聞いてちやいるがな。まあ、久しぶりだな。メイちゃん。いや、満月ちゃんだつてか？』

「早く覚えてね？そうそう、岳、武器の出し方って？」

「ああ、IDタグに通力フラーナを注ぐだけだ。ただ、ちゃんと使いたい武器をイメージしなきゃいけないみたいだな」

「わかった！やってみる」

そして満月は忍者刀つばい二振りの刀を取り出す。抜くと、両方がしゃべりだした。

『メイ！主はいつまで妾を待たせる気なのじゃ！まったく！大方忘れていたのであろう！』

『メイさん。お久しぶりでなんですが、姉が早々にすみません……』

「まーまー、忘れてた訳じゃないわよ花桜、フオローなんかしなくていいわよ葉桜。悪いのはこいつだし。あと二人とも、私は今は満月よ、覚えてね」

と、まあ、ここまで来たらわかると思うが、俺と満月の武器は両方共に『憑き刀』

わかりやすく言っちゃえば、妖刀だ。無茶苦茶な奴らだが、面白くて俺は好きだ。まあ、そんな奴らによってうやむやになって、その日の訓練は終わった。帰りでは、俺は諸葉とひたすらに漫画やアニメのトークをし続けた。諸葉とはかなり趣味が合い、馬もあつた。まあ、すぐに原作キャラと仲良くなれて良かった。と言ったところで、慌ただしいような、あつさりしていたような二日目は終わりを告げた。

第4話 スクラップの時間だけエエエ！ クツソ野郎 がアアアアアア！

やあみんな、オリ主の岳だ。今は何してるかって？そりやあもちろん、

「もう一回転生してくれば!?？そしたらあんたみたいな下衆でもまともな《救世主》セイウザーになれるでしょ！」

「あんだとこのクソアマがあ!!?！」

喧嘩を傍観中だ。助けん。それで何になる。まあ、ことのあらまはこうだ。

まず、本日も訓練所のアリーナで光技の練習中、石動弟（社会のゴミ）が《異端者》メタフィジカルがいつぱい出てきたら、俺ら仕事増えてウハウハじゃね？」メタフィジカルと言ひ、そしてそれにいつのまにか石動弟（繰り返すが社会のゴミ）の周りにいた腰巾着が同調、下衆い大笑い。それを聞いたサツキちゃんサツキちゃんが切れてふっかけ、売り言葉に買い言葉↑今ここ

つてわけ。で、まあこの後、原作通りに事は進み、サツキちゃんはあつさり負けてしまった。まあ、これは通力ツラキを使うようになって実感したことだが、両手の門だけごときが七門開通には叶うはずがない。石動弟のクズ加減を見て、その日は幕を閉じる……答だった。その日の夕方……

「覚悟はいいか!」

「いもーとの敵討ちつてかあ? 兄貴も辛えなあ?」

アルエ? なんかおかしいな? 田中先生に組まれるはずじゃなかった? なんで普通に戦つてんのこいつら。ご丁寧にアリーナで。で、なんで石動弟は多対一にしとるんや? あいつクズいな、まさかあまり通力ブレイクを使えん腰巾着を盾や閃光弾代わりにして、諸葉を確実に潰しに行つてやがる。観客も集まつてきてしまった……

「どうしたあ? 終わりかおにーちゃん? ヒヤハハハ!」

……ひどいなこりや。まるで公開処刑だ。

「……お前にあいつの痛みがわかるか?」

「あ? なんだつて?」

「お前にあいつの痛みがわかるかって聞いてんだこのゲス野郎!」

あれ? 目がおかしくなったかな? 上○さん……いや、一○通行さんか? が諸葉に乗り移つてるように見える。

「お前があいつの何を知つてる! お前にあいつの努力がわかるか? お前にあいつの健気さがわかるか? お前にあいつの可愛さがわかるか? お前はあいつの何もかもを知らないのにあいつをコケにするんじゃねえ! 何も知らないお前に、あいつを語らせやしねえ! だから俺は負けらんねえんだよ! 例え一対多でも! お前に負けていい理由にやなら

ねえんだよおおお！」

これは……あれを叫ばざるを得ないっ！

「カツコイイーツー!!? 惚れちやいそうだぜえ諸葉!!!?」(注：藤○啓治ボイス)

そう叫んでから俺は客席からスタジアムへ飛び降りる。通力ブレイクを使って難なく着地、諸葉の背中側に立って、静かに天椿を呼び出すと、こう叫んだ。

「亜鐘学園一年一組出席番号一番白鉄逢沢岳！義によつて助太刀いたす！」

岳 Side out

わーにんわーにん

ここからは下手な三人称視点並びに戦闘描写があります。そんなの見たくないでござる、という方は読み飛ばしてね！（戦闘で終わりではないため）

「諸葉、お前は石動に集中しろ、俺は雑魚を片付ける」

「わかった。一人強い奴がいるから気をつけろよ」

二人はそう短い会話を交わすと、お互いの敵に向かって走り出した。

アリーナの中心では、諸葉が石動と武器を打ちつけ合っている。少し離れたところでは、岳が諸葉の邪魔に向かおうとする奴からどンドン斬り伏せていく。五人いる中の四人を斬り伏せ、最後の一人と対峙する。

「……お前、七門開通してるな。感覚でわかる」

岳はそう言って武器を構える。相手も同じように武器である両手用の無骨な大剣を取り出し、構えた。お互いに全力で通力ツラカを使いぶつかり合う二組の戦いに、彼らを見守る観客達は、飲まれてしまったかのように一言も発することができなかつた。

諸葉は持ち前のスピードによって石動を翻弄し、石動の動揺や怒りを誘って単調になる攻撃の隙をつく戦い方を見せる。岳は、スピードとパワーを使つて、大剣の男と打ちあう戦いを見せていた。と、二人に今までなかつた動きが生まれた。岳は腰の鞘に武器を戻すと、そのまま鞘を左手で掴み、右手で柄を掴み腰を落とすと、集中しているかのように目を閉じた。一方諸葉は、唐突に頭を抑えたかと思えば、目をかっと見開いた。

(思い……出したっ!)

心の内でそう叫び、諸葉は何もない中空に左手を、さらに言えば人差し指を向け、思ひ出した通りに古代文字をその中空に書き出し、その詠唱を始めた。

「綴るー!」

冥界に煉獄あり 地上に燎原あり

炎は平等なりて罪惡混沌一切合切を焼尽し 浄化しむる激しき慈悲なり

全ての者よ 死して髑髏と還れ いざや火葬の儀を始めん

そう言い放つと、諸葉は締めめに拳でその文字列を叩いた。

それで、終。

あつという間に生まれた業火が、石動を飲み込み燃え盛った。

第三階梯闘術《火葬》イシネレト

白鉄であるはずの諸葉が、なぜか闘術を使っていた。

諸葉が詠唱を始めたのとほぼ同じ頃、岳は目を開くと、そのまま瞬時に相手の後ろにいた。相手は振り返った時、そのまま血を流して倒れた。静かに通力フラインナを出すのをやめた岳は、そのままただゆつくりと立ち上がり、諸葉の方へと向かった。そして諸葉も終わらせ、こちらへと向かってくる。二人は右手を上げると、そのままハイタッチをして、アリーナの出口へ静かに向かった。その決着に、集まっていた観客達はただ呆然と二人を見ていることしかできなかった。

岳 Side

ふいー。終わった終わった。いやはや、久々に暴れて楽しかったわ。と、諸葉がこう言い出した。

「貸し一……って奴か？今度なんか奢るよ」

ほうほう、それなら……

「ひとつ頼みがある。金土日潰しちまうが大丈夫か？」

「まあ、問題はないな。てかそんなに大変なのか？」

「まあ、ちよつと大掛かりなだけだ。あんまり気負わないでくれ」

と、まあこんな感じで、今日は終わりだった。明日、満月に無茶した事を謝んなきゃな……

第5話 かの武器とその秘密

やあみんな、オリ主の岳だ。久しぶりだな。今回は前回の喧嘩から約一週間ほどたった昼休みの事だ。セリフ……というより解説がかなり多いし、いざれ要約設定も書くし、今後もどんどん新設定を出す予定だと作者は言っていたから、今回に関しては読み飛ばしても構わない。……開幕メタ発言申し訳ない。作者に最初にこれを言っておいてくれと頼まれてしまっていてな。前書きで書きやいいのに……

と、まあ、俺は今諸葉に、「お前の武器はなぜ喋るのか」を聞かれている。いい機会だし、色々話しておこうと思う。

「俺の武器はな、憑き刀って奴なんだ。わかりやすく言えば付喪神って奴だな。まあ、今まで斬った奴の怨念も大量にこもってるだろうから、もしかしたら妖刀の方がしつくりくるかもわからんな。まあ、要するに、俺の天椿には、まあ、色々と厄介なもんが溜め込まれてるってわけだ。満月の葉桜も花桜も一緒だな」

とここで、勘のいい読者様はもう気付いただろう。「あれ？プロローグのお願いでんなこと言ってたっけ？」と。まあ、この設定は何だかよくわからないんだが、神様がくれたんだ。俺を転生させてくれた神様、確か名前は……「矢狐」様だったかな？が、天

界で他の神と俺の話をしたらしいんだ。そしたら、他の神は口を揃えてこう言ったらしい。
い。

『もつと強い設定つけてやれよ！』

本人……まあ、俺な。は別にそんなに強くなかったってなんら問題はないからそんなにサービスされなくても全く問題ないんだが、こうして図らずも中々に無茶苦茶な設定の武器を手に入れることと相成つちまつたわけだ。それにしてもこの天椿、めちやくちや強い。ただ、とてつもなくうるさく、そして扱いに困る。なぜなら、こいつを使おうとすると、こいつが喋るわこいつに溜まつてる怨念が入り込んでくるわけで、この天椿自体のスペックはとんでも無いのだが、いかんせん癖がありすぎる。まるで格ゲーによくいるカウンター技が豊富なキャラみたいな扱いづらさがある。まあ、そんなことはどうだつていい。重要なことじゃない。問題なのは、「これでちゃんと伝わったか」なのだ。今回は前書きで書いた通り、「武器の秘密について」の話をしたわけだが、これで伝わったか、それは本当に重要なことだ。これで伝わってなかったら、作者はきつとめつき反省してしまうだろうな。それじゃ、そろそろ締めくくらせて貰う。次の回なんだが、内容がちよつと独特だから、ちゃんと後書きを読んで、読むか読まないかを判断してくれ
では。

第6話　という名のちよつとしたお話

「と、いうわけで始まりました。今回はちよつとしたお話、まあタイトル通りですが。をさせていただきます。どうぞよろしく」

『岳、固くない？もつとリラックスしてやったら？』

「そうは言ってもな……まあ、今回に関しては作者の方から話があるらしいから作者を呼ぶか。おーい作者」

……呼ばれて普通にじゃじゃじゃーん。というわけで作者参上です。

「ちよつとしたお話ってのは何だ？てか、俺と満月を呼びつけてまですることなのか？」
……貴方がたに来ていただいたのは、さすがに作者が喋るだけじゃ絵面(?)がよろしくなさすぎるからです。で、する話とは、

『「する話とは？」』

……《聖剣使いの禁呪詠唱》用語解説、並びに本作品《聖剣使いの禁呪詠唱》よくある神様転生ですのキャラデータのまとめ、です。

「……んなことする必要があるのか？読んでる人はそのくらい知ってるだろ。俺らはオリキャラだから除外にしても」

……私、この作品の読者様は4タイプに分かれてると思うんです。まあ、大概の作品の読者様は4タイプに分かれてますけどね。

一つ目は、原作知らないけど、なんかたまたま目に付いたから読んでくださっている方々。

二つ目は、原作知ってる、だからこれを見つけて読んでくださっている方々。

三つ目は、原作知らないけど、私を知ってるから読んでくださっている方々。

四つ目は、原作知ってる、私を知ってるから読んでくださっている方々。

って感じだと思うんです。

「まあな、お前前作（凍結中）も一応UA2000越えてんだろ？」

……もうちよいで3000なんですけど、あまりにも読む人がいませんからね。ま、とにかく、原作を知らない人も当然いる筈なので、今回が鼻☆塩☆塩な回になったんです。

『じゃ、もーそろ本題に入るべきじゃないの？さすがに無駄話が多すぎるんじゃないやない？大体、作者が今回を書くのってリア友に小説書いてんのがばれたからでしょ？嘘つくのはやめなよ』

……まあぶっちゃけるとそうなんですよね。原作知らないリア友のために今回を書くわけです。

それじゃ、始めましょう。

解説く用語編く

救世主……英雄の記憶を宿す輪廻転生者達の総称。あるときから、異端者※後述 と共に現れた。前世には主に二つの種類があり、白鉄※後述 と黒魔※後述 に分かれて

いる。

異端者……救世主の出現のきっかけとなった怪物。救世主の使命は、これらを倒すこ

と。

白鉄……本来は《光技の使い手》と呼ばれる。通力※後述 を身に纏い、身体能力を引

き上げ、主に前世で愛用していた武器を使う。F a t e で例えるとキャスター以外の全

ての英霊はこれに該当する（A U O はまた少し特殊なので考えない）

黒魔……本来は《闇術の使い手》と呼ばれる。魔力※後述 を練り上げ、詠唱と共に虚

空に太古の文字を綴り、いくつかの階梯にして放つ。F a t e で例えるとキャスター。

通力……白鉄が使う力のこと。これを身に纏い、身体能力を引き上げる。また、光技と

呼ばれる使い方の種類があり、使い分けることがより強い救世主への一歩である。わか

りやすく例えると、H×Hの念。

魔力……黒魔が使う力のこと。また、闇術と呼ばれる魔法の種類があり、階梯が多いほ

ど強力とされる。わかりやすい例えは浮かんでこない。

源祖の業……白鉄の光技と黒魔の闇術の総称。様々な種類が存在する。

……今のところはこの程度でしようか。

「だな。これからもいくつか用語は出てくるが、今のところはこれでいいだろ」
『てか例えで余計にこんがらがらない?』

……次のキャラデータ、行きましようか。

「逃げんなよ……」

解説くキャラ編く

逢沢岳……本作品《聖剣使いの禁呪詠唱くよくある神様転生ですく》の主人公。神の

やぎつね

矢狐※後述 の部下の神のミスによって不運にも死んでしまい、神様転生を申し出られる。因みに行く世界がなぜか《聖剣使いの禁呪詠唱》で決まっていた。※なぜ行く世界が決められなかったのかは、矢狐の欄に記載

必要以上の力はいらないが彼女は欲しいと言った謎の思考回路を持つ。貰った転生

特典は

・通力ブライナを扱う才能

・イケメンな容姿

・頭脳と身体能力を一廉程度に

・彼女、花咲満月はなさきみつぎ※後述

・草笛の才能

の5つ。これ以降も多少は増えたと聞く。そして自らの設定を、前世が抜刀剣士とした。彼女である満月を溺愛しており、すでに婚約済み。白鉄。

容姿……SAOより、主人公キリトと、いつ天より、主人公大兔の容姿を混ぜ、二で割ったような容姿。腕や脚はすらつとして長い瘦せ型。

身長……181cm

体重……60kg

CV……逢坂良太

はななききみつき

花咲満月……本作品のヒロイン。岳が矢狐※後述に頼んだことによつて岳の幼なじみ並びに彼女、かつ婚約者である。元気な性格だが、時に冷徹さも見せる。因みにこちらも岳を溺愛している。白鉄。

容姿……東方projectより、十六夜咲夜、ほぼまんまと考えてくださるとありがたい。

身長……167cm

体重……不明

スリーサイズ……不明

CV……早見沙織

やぶつね

矢狐……岳を転生させた神様。割と世話焼きな苦勞人。岳を《聖劍使いの禁呪詠唱》の

世界に送ったのも、実はその世界を管理している神が、いい英雄が生まれないとぼやいていたのをなんとかしてあげたかったから。ちよくちよく本編に登場する予定。

容姿……よくイメージされる神様っぽい感じ。

身長……不明

体重……不明

CV……石塚運昇

……これでオリキャラ分のデータですね。

『天椿や花桜に葉桜のデータは？』

……まだまだ明かされていない部分が多いので、その全てが明かされてから書きま
す。

「次は？」

……原作のメインの3人ですね。始めましょう。

はいむらもろは
灰村諸葉……《聖剣使いの禁呪詠唱》の主人公。たまたま入る事になった亜鐘学園にて、

前世で深い関係にあった二人と再会を果たす天然女たらし。アニメ、ゲーム、漫画、特
撮、ラノベネタが通じる。白鉄(?)

容姿、身長、体重……略

CV……石川界人

嵐城サツキ……《聖劍使いの禁呪詠唱》メインヒロインその1。前世で兄であった諸葉を慕っている。猪突猛進な熱血漢。ちなみに前世では禁断の愛に墜ちたとか墜ちてないとか。白鉄。

容姿、身長、体重、スリーサイズ……略

CV……竹達彩奈

漆原静乃……《聖劍使いの禁呪詠唱》メインヒロインその2。前世では夫婦だった諸葉を想っている。人をからかうのが大好き。黒魔。

容姿、身長、体重、スリーサイズ……略

CV……悠木碧

……こんな感じでしょうか。

「いいんじゃないの？じゃあまた、用語が出たら後書きで解説ってことで」

……せーの

……『バーイ、センキュー』

第6話 来訪者

やあみんな、オリ主の岳だ。久しぶりだな。今回は前の続きだ。同じ場面だと思つてくれ。

「いやいや、俺の事は正直どーでもいいんだよ。問題はお前。まっさかお前が『最も古き英霊』だとはなあ……学園長先生が言つてたのがまさか実在するとは……」

「……エンシエントドラゴン？てか学園長先生つてどゆこと？」

満月が聞いてきたので、一応答えておく。

「いやな、学園内ブラブラしてたら変な子に捕まつてさ。その子に流されるままになつてたら学園長先生と出会つたんだよ。んで、今後は時々色々勉強させてもらうために先生になつて貰つたんだよ。代わりにその子と友達になるつて条件でな」

「で？エンシエントドラゴンつてのはなんなんだよ？どうして俺がそうなんだ？」

諸葉が急かしてきたから、話を戻す。

「学園長先生の言葉を借りるなら……確か、『ブライナ通力もマリーナ魔力も使える者が現れる、というの
は理論上は考えられる。しかし、それには宿る魂が輪廻転生者として長い時間を過ゴさ
なくてはならない。しかも、その間その魂でい続けて、な。そんなことがありえるなら、

その魂はまるで、ドラゴンみたいな化け物だ』つてことで、『エンシエントドラゴン最も古き英霊』つて事らしい。まあ、正直なところ、てかどストレートに言えば、諸葉、お前は『ありえねえ』んだ。理論上にしか存在しないものが体現してるわけだしな」

「で、なんで俺がその『エンシエントドラゴン最も古き英霊』だつて言えるんだ？」

「え？おめー、自分が何したか覚えてないの？」

「恥ずかしながら……あの日決闘のときの記憶は曖昧なんだ。なんでか思い出せるのはちよつとだけで、ほとんど覚えてないんだ」

そーゆーことか、多分戦いの中で唐突に閃いた……いや、『思い出した』か。それ故に、脳には多大な負担がかかって、不要でしかない決闘の最中のときの記憶は消えた、いや、思い出す必要が無くなったんだろうな。……正直、あんなクサクてダサクて恥ずかしくつて、しかしイケメンだったあんなセリフを言った、なんて覚えていたくは無いらうし。会社一緒の某落第騎士も決めゼリフを客観的に言われて超恥ずかしがったし。ま、ここは黙つてやるか。

「お前がやったのはだな、白鉄の身で闇術を使ったんだよ。だからありえないんだつて」
「え……まじで？」

「思い返せ、戦いの終盤だけでもだ。それで俺の言ってることは嘘じゃあ無いってわかるさ……ところでなんだが、貴方は一体誰ですか？」

「え？何言ってるんだ岳？」

「あー、それ私も気になってた。デートのときもいつのまにか後ろにいたりしてね。誰なの、あなた？」

「ここ最近、常に付きまとわれていた気がしていたし、ついだからここで尋ねてみることにしよう。……諸葉や俺らの秘密も聞かれたわけだしな。」

「……気付かれていたのか。なら、もつと早く声をかけるべきだったかな」
観念したかのように、そいつは出てきた。……どーゆーこつちやい。

「どうしてあなたがこんな事を……『石動迅』さん」

「石動迅^{!!}? あなた、石動迅だったの^{!!}? 私らのストーカーが^{!!}?」

「満月! 口悪い! ストーカーは事実だが実戦部隊ストライカーズの隊長さんで亜鐘学園唯一のAランクだぞー! ストーカーは事実だけどー!」

「岳……お前もストーカー連呼はどうかと思うぞ」

大事な事なので。と、それより……

「弟の仇撃ち、ですか? それとも別の?」

「弟の、という点では間違っではないかな。別の目的がある、という点も」

……まあ、彼は弟とは違う感じがするな。話は聞こう。

「まずは、嵐城サツキさん」

「は、はい！」

「弟が済まなかった。いつもいつもやりすぎるなど言っているんだが、いつもそれを守ってくれない。今回の事が、あいつにはいい薬になったと思う。それに関しては、灰村くん、ありがとう」

「いえ、わざわざ謝らなくても！」

「お礼を言われるようなことはしてませんよ」

上からサツキ、諸葉が口々にそう言った。うーむ、流石は隊長。できた人だ。

「さて……ここからもう一つ、重要な話だ。灰村諸葉くん、逢沢岳くん。君達を、『ストライカーズ実戦部隊』のメンバーに加えたい。この話、受けてくれるか？」

……え？今なんて？

「すいません、もう一回お願いします」

「君達に、『ストライカーズ実戦部隊』に入隊してもらいたい。あの戦いを見せてもらったし、担任の田中先生にも話を聞いたんだが、君達の実力は素晴らしい。ならば、より強い者が欲しいストライカーズ実戦部隊が、君達を逃す手は無い、という事だ。理解してもらえたかな？」

いや、理解はしたがわけわからん。ストライカーズ実戦部隊が俺らを欲しいのは理解したんだが、エンシエントドラゴン「何故俺まで？スカウトするなら諸葉……最も古き英霊だけでも充分でしょう。俺まで入隊させる……というか、『切り札』にする必要は無いでしょう。違いますか？」

「切り札？岳、お前何言ってるんだ？」

「簡単な話だ。諸葉を^{ストライカーズ}実戦部隊にするって事は、逆を言えば、諸葉を『日本の亜鐘学園に所属する人間』つまり、『日本の人間』であると高らかに主張するつもりって事だし、その部隊に所属させれば、管理も容易いってわけだ。監視も簡単だしな」

「だからって、なんで俺を監視する必要があるんだ？」

「考えてもみろ？お前に好きなように指示できる国つてのは、他の国に害をなすレベルに強烈な力をもった……『戦術級のバケモン』に指示できるわけだ。しかもそのバケモンは『そいつがどんな戦い方をするか』も『そいつの倒し方』もわかんねえんだぞ？怖くね？」

「ああ……まあ。って誰が戦術級のバケモンだ！」

「お前はそうなるってんの！あともう一つ、俺は満月と一緒にいたいので丁重にお断りします」

「ひよつとしてそつちが本当の理由か……？」

「Exactry（そのとおりで）ございます」

『……』

場を沈黙が支配した。その時俺は……！

「満月、行こうか。もうそろそろ昼休みが終わるわ」

「うん、そだねー」

最終手段『逃げの一手』で場から離れることにした。まあ、そんな感じでこの奇妙な話し合いは完結することとなった。……なんか、色々石動さんには申し訳ないな……

第7話 実戦部隊とイレギュラー

やあみんな。……やあ、みんな。オリ主の岳だ。超超超久しぶりだな。みんなストーリーを忘れてないよな？ま、前回の後に、諸葉も入るし満月も予備隊員になるから、という条件で、俺は実戦部隊ストライカーズに入る事となった。それで、今日から演習だって言われて、アリーナに移動したんだ。そこから今回は始まる。……色々はしよって申し訳ないな。すまないがここまでで文章にできる部分が無いんだ。

「ようこそ実戦部隊へ。彼らがこれから君達の仲間となる人達だ」

「よろしくお願いします」

挨拶をする俺と諸葉。諸葉は素直に挨拶をしているが、俺はじつと実力を見極めようとしていた。なにせ、気をつけなければ死人が出るほどに天椿は強大な力を持っている。いざ使おうとしたのに、仲間が危ないから使えない、では拍子抜けしてしまうからだ。

と、考えていたところで、石動隊長からこんな声がかかった。

「さて、急で悪いが君達の実力を見せてもらえないか？その方が、お互いに信用できると思うのでね」

俺にとってはあまり好ましい提案ではなかった。なにせ、「実力とは見せるものではなく、感じさせるもの」が俺の持論だからだ。……まあ、見せることが決して悪いことでは無いし、早く実戦部隊に馴染めるように、という隊長なりの気づかいなのだろう。ありがたく受け取ることにしよう。

「先は諸葉に譲るよ。存分に見せてこい。力むなよ？こーゆーのは、どうやったって上手くいくモンさ」

「ああ、ありがとな、岳。それと、『自然体』は俺の信条さ。もちろん、存分にやらせてもらうぜ。次のお前のインパクトが薄くなるくらいにな」

「言ったな？その言葉を忘れんなよ？」

と、まあ順当に光技と闇術の力を見せた（光技は弾かれ闇術は打ち消された。Aランクなんだし凄いんだろうとは思っていたが、これは純粹に驚いた）諸葉に続いて、俺の番となった。

「さあ、始めますかね」

天椿を顕現してから、奴に聞いてみる。

「なあ、『アレ』何発打てる？」

『お前のコンディション次第だよ。前だつてそうだつただろ？』

「その言葉を聞いて安心したわ。じゃ、やるか」

そして俺は、鞘に天椿を収め、静かに息を吐く。そして、俺の技を受けようとしている隊長に、こう話した。

「隊長、下がっててください。手加減できるか怪しいです」

「構わないよ、存分にやりたまえ。それにここはアリーナだ。多少の怪我なら平気さ」

「なら……遠慮なく」

そして、思いっきり息を吸い込む。吸い込み切った瞬間の、時間にしてみれば刹那の様な時に、俺は放った。

「我流抜刀……烈閃斬空」
れっせんざんくう

全てが終わった後に、技名を呼ぶ。直後、隊長の全身に切り傷が表れ、全身から血が吹き出る。倒れ伏す隊長の顔は、しかし笑っていた。さて、ここで俺が何をしたか話そう。一言で言うなれば、とある兄鬼の「次元斬」の様なものだ。彼と違い、魔力的なものではなく、まじで瞬間に動いて斬りまくり、元の位置にただだから、彼のそれよりは遙かに劣る。……ちなみに、作者は3の最初の戦闘、easyなのに必死になって倒したそう。かつこ悪い。

と、いうのも実は嘘。実際は単に天椿の力で斬撃を飛ばし、定点で固定。後は斬撃を開放すればあつと言う間に烈閃斬空ってわけだ。まあ、『烈閃撃空を斬つ』で烈閃斬空だし、なんとなく予想がついていた人もいるのではないのだろうか。その後、外に運ば

れた隊長はすぐに戻ってきて（これが本当に驚いた。倒れ伏す瞬間に笑っていたこと以上に、俺と天椿の全力をくらったわけなのだから、たとえ傷は回復しても精神はすこしきついものになるはずだからだったたりする）練習は開始されることとなった。ハードな訓練、という話だったが、言われていたほど辛いとは感じなかった。体を鍛えていたことが、ここまで有効活用されるとは思わなかった。体ができている、ということはそのまま通力の鍛錬に移れる、ということだ。それはズバリ、勘を戻すための時間をたくさん掛けることができるわけだ。……まあ、勘を戻すも何も俺と満月はちよつとした出来事によって七門は既に解放済みだし、七星系統の技を覚えるくらいしかやることが無いんだけどな。だがしかし、その七星はやはり驚異的だ。すこしかじる程度に覚えたレベルではあるが、凄まじいほどに出力が上がり、効率も良い物に変わった。おそらく満月もこの力を体感していることだろう。と、まあ、そんなような練習が何日も続いたんだ。その間にもサツキと諸葉の間でちよつとしたことがあつたりしたんだ。それは原作とあまり変わらないイベントだから、割愛させていただこうと思う。そんなこんなで、今日はいよいよ運命の日が来ちまつたんだ。そう、九頭大蛇の異端者が出現する日だ。ここまでの日々が原作とあまり変わらない展開だったから、おそらく出現する場所も強さも変わらないだろう。……そう思っていた時期が俺にもあつたわけだが。

「な……シヨツピングモールの異端者メタフイジナルに加えて、すぐ近くに別の異端者メタフイジナルまで出現しただ

と!??...いったいこれはどういうことだ!??」

隊長が報告を聞いて驚いている。いや、ぶっちゃけ俺も叫びたいわけだ。「どーゆーこつちやい!」って大声でな。原作との乖離点が生まれるかも、みたいな事を話されたりはしたが、これは予想外だ。しゃーない。こつちは俺が行くか。もうあいつは行つちまったしな。

「岳!」

「満月?」

「行かないでよ!あなたが死んだら.....私.....」

「満月、目閉じな」

「うん.....」

目を閉じた満月に、キスをしてからこう語りかける。

「必ず帰るさ。心配すんな」

「うん.....まってる!」

隊長が何か言っていたようだが、聞こえなかった。今はただ、あのヴァ○ユラつばいのを倒すだけだ!

「天椿!アレやるぞ!」

『オーケー!多分今の状態じゃ3分ぐらいしか保たねえから、派手にやろうじゃねーか

！』

「ああ、思いつきりな！」

『呪力通力 解放！』

全身全霊！3分どころか、30秒で片付けてやる！